

優秀賞（NHK 松山放送局賞）

「知ろうとする心」

松山市立道後中学校　2年　グエン　グエン　アン

まだ小学校に上がったばかりのころの話だ。家の近くの公園で、西洋系だと思われる姉妹が、数人の子どもたちに何か言われている場面に出会った。少し離れていたが、「髪の色や目の色が変。」というような言葉が聞こえてきた。確かに、その姉妹は黒い髪や黒い目ではなかった。自分たちと違うところがあるから「変だ。」と言い、仲間外れにしている。それが分かって幼い私は不思議だった。ブロンドの長い髪と明るい青色の目。「変」ではなく「きれい」だと思ったからだ。自分と同じ人間でも、見た目がこんなに違うことがあるんだ、と思ったが、変だとは到底思えなかった。その日、家に帰ってからもすっきりせず、もやもやしたものが胸に残った。

私も日本が母国ではない。日本で生まれたが生後まもなくベトナムに帰り、五歳になる前に、父の仕事の都合で再び日本に来た。日本で幼稚園に入園したが、初めて登園した日には、何人かの子が私を見て首を傾げていた。今考えると、その子たちは自分とは違う国から来

た人を初めて見て、警戒したのかもしれない。髪の色も目の色も同じ黒だったけれど、何か違うものを感じたのだろう。母国との違いは大きく、私は、日本の生活に慣れることはないとと思っていた。でも、そういうではなかった。

私は外国人のためのクラスで三か月くらい日本語を学んでから、普通クラスに入ったが、最初は、自分から話しかけることはできなかった。そのうち、三人くらい話しかけてくれたが、早口で何を言っているのか分からなかった。焦っていると、その中の一人が気付いて、ゆっくり話し始めてくれた。私はびっくりした。そしてその優しさが嬉しかった。一年たってだいぶまともに日本語が話せるようになつたころには、日本での暮らししが楽しくなっていた。

自分の幼稚園のころのことを思い出し、同じ外国人でも見た目が大きく違うと、もっと大変なのだと思った。その数日後、家族と一緒に訪れた公園で、私は姉妹と再開した。

私は思い切って話しかけてみた。すると、はじめは日本語で会話してくれようとし、私が理解しにくいようだと気付くと、英語で話してくれた。二人はとても優しく、丁寧で、面白かった。姉の方は私より二つ年上。私たちは遊びながら、学校のこと、家のこと、趣味など

たくさん話をした。とても楽しくて、別れてからもしばらくは姉妹のことばかり考えていたほどだ。けれども、この出会いが、姉妹にとつては私以上にうれしいできごとだったということを、三度目に出会ったときに知ることになった。

再会から一年半たって久しぶりに会えた日、姉の方から、「仲間はずれになっていたこと、何か月も後になって謝ってもらえたこと」を聞かされた。そしてお礼を言われたのだ。私に初めて話しかけられたあの日、また容姿について何か言われるのだと身構えたけれど、私が二人の容姿について触れなかったことにとても驚いたそうだ。私のささいな行動が、仲間外れや悪口に悩んでいた二人の心を軽くしたのだと知って、うれしかった。

人種の違いによる偏見や差別はまだ存在する。それを解決するため一番大切なのは、政治とかといったおおげさなものではなく、一人一人の小さな交流であり、相手を知ろうとする心なのではないだろうか。

この世には、自分の知らない人が何十億人もいるが、全てを知らないといけないわけではない。大事なのは目の前の人や物事を少しでも知ろうとすること、そしてとりあえず話してみると、多く

の人に知ってほしいと私は考える。相手から歩み寄ってくるのを待つのではなく、自分から歩み寄るのだ。話せば話すほど、相手の考え方や個性がわかってくるはずだ。そこから、相手の印象がこれまでと大きく変わることがきっとあるだろう。知ろうとしなければ、話そうとしなければ、第一印象や思い込みが覆ることはない。

いろいろな人の考え方を知ろうとして話をする。悪い方に捉えるのではなく、良い方に捉えるように自分でもっていく。それを、私はこれからも大事にしようと思う。

中学生になった今でも、日本語の言葉の意味がところどころ理解しづらいことがあり、素の私は、人とコミュニケーションを取るのが実は苦手だ。新しく出会った人に話しかけるのが怖いときもある。でも、教えてくれる人や、話しかけてくれる人がいるとうれしい。だから私も、少しでも自分から話しかけるようにし、悪い状況を変えていくよう行動してきた。生まれた国や人種の違いによる壁は越えられないものではない。そこから生まれる偏見や差別も、減らしていくことはできるはずだ。相手を知ろうとする一人一人の小さな勇気、心がけを広げていきたい。